

自分自身や自分の生活とのかかわりでとらえる社会科授業の創造

枝 迫 大 明〔鹿児島大学教育学部附属小学校〕

The study of social studies classes

－How to let pupils to understand the relationship between themselves and the society－

EDASAKO Hiroaki

キーワード：知識構造，中心人物，問題解決的な学習過程，言語活動

1 はじめに

「社会科の授業をするのは難しい」とよく聞く。難しくさせている原因は、社会科の教科目標に向かって多様な授業展開ができるということではないだろうか。教科目標に向かって多様な授業展開ができる社会科であるからこそ、教師は目標・内容・方法を明確にし、子どもが切実な問題意識をもって追究できるような授業を構成することが必要であると考ええる。つまり、どんな学習内容を、どんな学習方法で子どもに教え考えさせるのかを明確にもつことが教科目標に迫ることになり、社会科の授業をつくる難しさをクリアすることになると考える。

2 「自分自身や自分の生活とのかかわりでとらえる」について

自分自身や自分の生活とのかかわりでとらえる子どもは、出会った社会的事象を「そうだったのか。」「なぜ、そうなったのだろうか。」「自分だったらどうしようか。」などと、追究意欲を高めながら問題解決能力を発揮している。

そこで、自分や自分の生活とのかかわりでとらえられるようにするために、教えた学習内容の知識構造を明確にし、中核を成す人物を知識構造に位置付けた授業にしたい。

また、追究意欲が高められるように授業を構成したり、共に学ぶ仲間の考えに触れながら、自分の考えを深められるようにしたりできるようにすることで、主体的に学習を進められるような授業にしたい。

このように、学習内容の中心を成す人物や共に学ぶ仲間にかかわれるように授業を構成したり、知識構造を明確にしたりすることで、自分自身や自分の生活とのかかわりでとらえることを容易になると考える。

3 テーマに迫るための視点と実践内容

ここでは、第5学年単元「住みよい環境を守る」を通して、学習内容からの視点、学習方法からの視点で取り組んでいく。

(1) 中核をなす人物を素材に扱った学習内容

- ・視点A：知識構造の明確化
- ・視点B：中核を成す人物の知識構造への位置付け

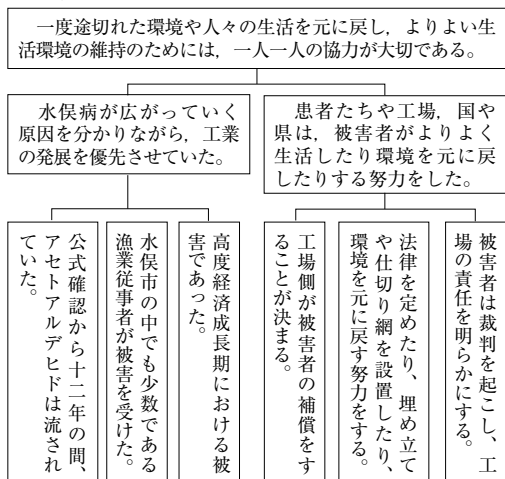
(2) 子どもが主体的に学習を進める学習方法

- ・視点C：問題解決的な学習過程
- ・視点D：社会的な見方や考え方を深めるための言語活動の充実

4 自分自身や自分の生活とのかかわりでとらえる社会科授業の考え方

(1) 知識構造の明確化【視点A】

単元「住みよい環境を守る」の知識構造を以下のように設定した。その際、因果関係が明確になるように構造化した。



そして、中核を成す人物を知識構造に位置付け、人物らに学べるようにする。

(2) 中核を成す人物の知識構造への位置付け

【視点B】

単元「住みよい環境を守る」に登場する人物と業績は以下の通りである。

○ 細川 一 (ほそかわ はじめ)

工場の付属病院長である。水俣保健所に奇病発生の報告をした。水俣病公式確認とされている。また、第一次訴訟において猫400号実験の証言をする。このことが決め手となり、被害者への補償が決まる。

- ・ 公式確認から12年の間、アセトアルデヒドは流されていた。
- ・ 工場側が被害者の補償をすることが決まる。

○ 西田 栄一 (にしだ えいいち)

工場長である。西田天皇と称されるほど、工場内において実権を握っていたと言われる。1979年に有罪が確定される。亡くなるとき、家族に「罪人となった私を許してほしい」と告げ、葬式を行わず、戒名も拒んだ。

- ・ 工場側が被害者の補償をすることが決まる。

○ 被害者 (杉本 栄子ら)

「工場の城下町」と言われる水俣市において被害のほとんどは漁業従事者だった。当時の水俣市の人口5万人のうち、5割近くは工場にかかわっている人々であり、漁業従事者はおよそ200人であった。第一次訴訟で勝訴したが、市民は無関心、あるいは工場に同情的であったと言われる。

杉本氏は、水俣市に住む網元であり、両親を水俣病で亡くしている。第一次訴訟の際は中心となって裁判に挑んだ。

- ・ 被害者は裁判を起こし、工場の責任を明らかにする。
- ・ 水俣市の中でも少数である漁業従事者が被害を受けた。

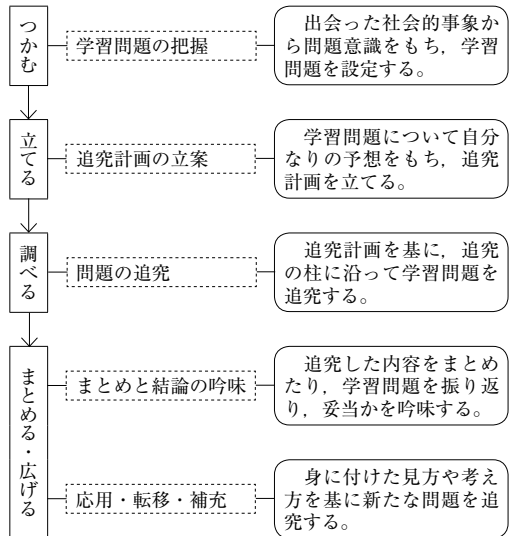
○ 行政 (国や県)

1968年に政府が工場排水に含まれるメチル水銀が原因であることを発表した。水俣病公式確認から12年がかかっている。また、訴訟後は、7.5kmに渡る仕切り網を23年間設置したり、485億円をかけてヘドロ等を埋め立てたりして、環境を元に戻す努力も行った。

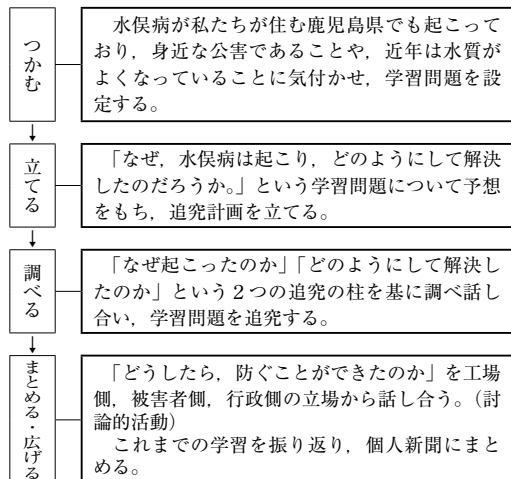
- ・ 法律を定めたり、埋め立てや仕切り網を設置したり、環境を元に戻す努力をする。

(3) 問題解決的な学習過程【視点C】

本校社会科の学習過程は一単元1サイクルのひとまとまりとし、以下のように問題解決的な学習の流れになるよう工夫している。



そして、この学習過程に、本単元に身に付けるべき学習内容を、以下のように取り入れた。



まず、学習問題とまとめが問いと答えの関係になるようにする。次に、学習問題を追究する際の調べること（追究の柱）や調べる方法を明らかにし、追究計画を立てる。

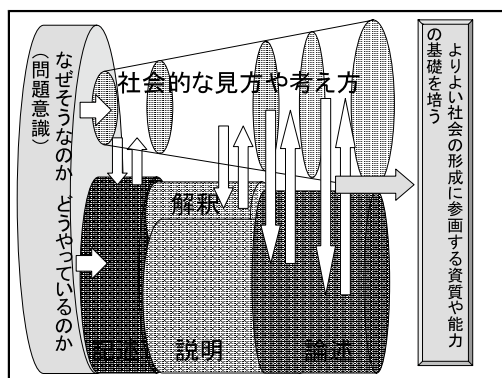
子どもが、追究意欲を高めながら主体的に学習に取り組めるようにするために、主に次のような

具体的・基礎的資料や体験活動を各学習過程に位置付け、出会った社会的事象を自分の力で解決しているよさを味わわせるようにする。

- ・現在の水俣湾の海水：「つかむ」過程
- ・読み物資料（鹿児島県環境政策部出版）、細川一、被害者に関するDVD：「調べる」過程

(4) 社会的な見方や考え方を深めるための言語活動の充実【視点D】

本校社会科では、社会的な見方や考え方を深める言語活動を「事実を根拠とした記述、解釈、説明、論述といった言語活動を位置付けることを通して、社会的な見方や考え方をよりよく深めること」ととらえている。



本実践では、「まとめる・広げる」過程で、高まった考えや解釈を帰納的・演繹的に説明し自分なりの判断を述べたり、身に付けた概念を再構成して述べたりする「論述」を位置付ける。そこで、討論的活動に取り組むことを通して、自分自身や自分の生活とのかかわりで意志決定できるようにする。その後、これまでの学習を振り返った個人新聞を作成させた。

5 自分自身や自分の生活とのかかわりでとらえる社会科授業の実践

(1) 「つかむ」過程 視点C

ここでは、「私たちにとっても身近な出来事である。」と、自分の生活とのかかわりがあることに気付かせたり、「どうやって解決したのだろうか。」という疑問をもったりすることが、追究意欲を高めることになると考えた。そこで、まず、

水俣病の認定患者数を示した地図を提示し、鹿児島県との県境であることや、被害が八代海を中心に広がっていることをとらえさせた。

次に、1972年の八代海の写真を提示し、見た感想を発表させた。

そして、現在の水俣湾の海水を持ち込み、匂いや色に着目させながら、現在の水俣湾の写真を掲示し、過去と現在を比較させながら、学習問題を設定できるようにした。

(2) 「調べる」過程 視点A, B, C

ここでは、水俣病が起こった原因や解決方法について、一人調べを基に進めた後、原因や解決方法について学級全体で話し合った。

なお、一人調べを進める際には、読み物資料やDVDを子どもの調べ学習の状況に合わせて渡すことにした。

① なぜ、起こったのか

一人調べを進めさせる中で、子どもが考える水俣病の原因は、「アセトアルデヒドの生産過程で精製されるメチル水銀が原因である」や「食物連鎖によって魚が汚染され、汚染された魚を食べたことが原因である」ととどまっていた。

そこで、学級全体で話し合う際には、アルデヒドを止めるまでに12年かかっていることが生まれてから小学6年生になるまでであることから、「なぜ、12年もかかったのか」という切実な問題意識をもたせてから、追究問題を設定した。

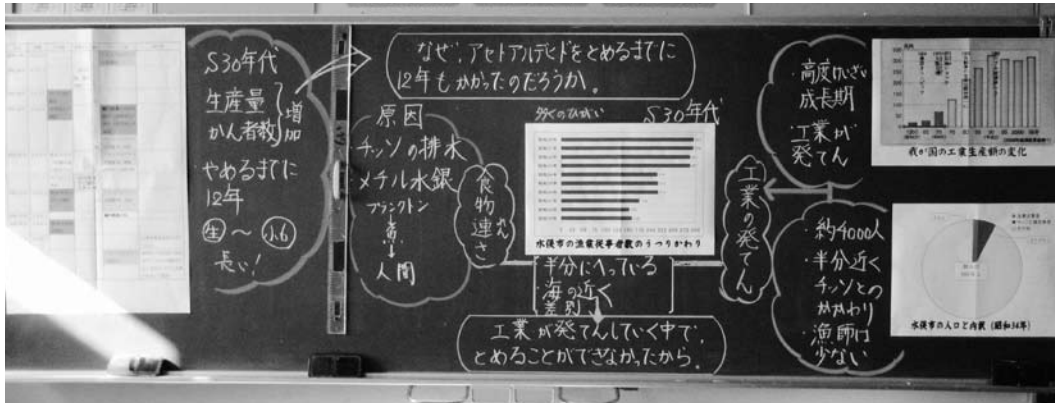
12年もかかったことと食物連鎖がつながらないことから、「どんな時代だったのだろうか。」と発問しながら、我が国の工業生産額のグラフや当時の水俣市民の職業別人口グラフを提示し、工業が発展している過程で起こった公害であることをと



【認定患者数を示した地図】



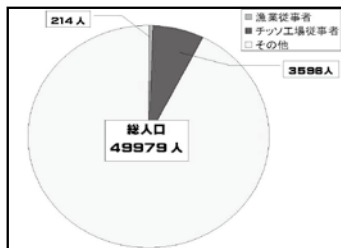
【水俣病の過去と現在の比較】



【原因について話し合う段階の板書】

らえさせた。

そして、漁業従事者数の変化を示すグラフを提示し、少数の漁業従事者の人数が減って



【昭和34年の水俣市の人口と内訳】

ることから、多くの被害を被っているのが漁業従事者であり、工業が発展する中で排水を止めることがなく、漁業従事者に被害が広がっていくことをとらえさせた。

その後、水俣市茂道地区の当時の様子を表す資料を配布し、人々のくらしが成り立たなくなったり、人間関係も破壊されたりする様子に気付かせた。



【単元終末に見られた原因に対する考え】

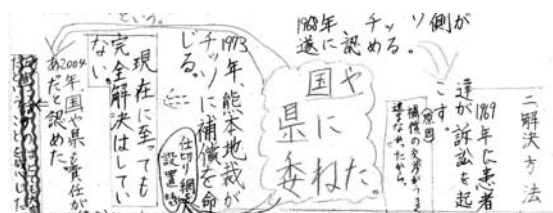
② どのようにして解決したのか

解決方法について一人調べをさせる際には、工場側、被害者側、行政側で調べさせ、それぞれが

どのような取り組みをしているのかをノートに整理させた。

学級全体で話し合いながら事実を整理しながら、「悪いのは工場であって、工場は反省しなければいけない」という発言があった。そこで、当時の工場長西田栄一氏が家族に言ったという「罪人となった私を赦してほしい」や「葬式無用、戒名なし」を取り上げた。工場側の責任や保障が裁判等によって明らかになる中で、工場長も有罪になった。これらの事実を取り扱うことを通して、公害病にかかった人の思いや苦しみを共感的に受け止めることができた。

授業の最後に、工場側、被害者側、行政側の取り組みを一言で表現させるためにグループで話し合わせた。そして、「救し」「生活の向上」「環境保全」から、人々が願っていたことが「人のつながりや環境を元に戻すこと」であることから「もやい直し」につなげることとなった。

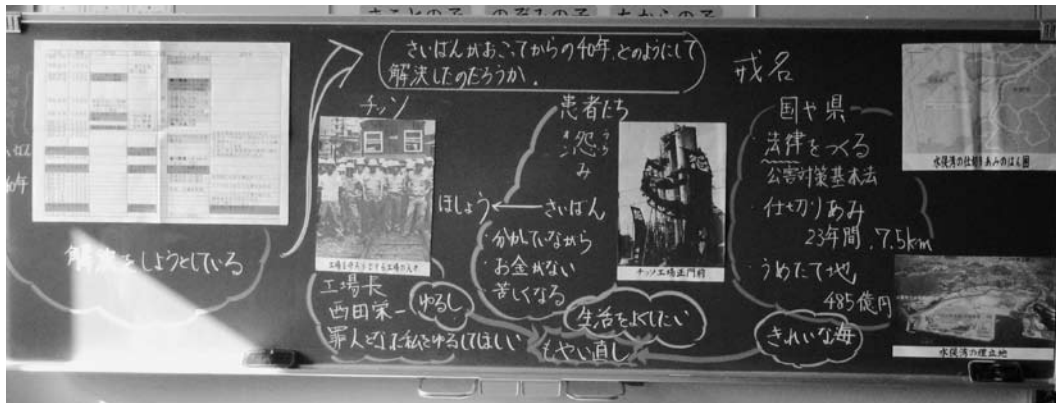


【単元終末に見られた解決方法に対する考え】

(3) 「まとめる・広げる」過程 視点D

① それぞれの立場からの討論的活動

「なぜ、もっと早く解決しようとしなかったのだろうか。」という子どもの意見が多数出てきた。



【解決方法について話し合う段階の板書】

それぞれの立場（工場側、被害者側、行政側）から互いの考えをぶつけたいということから、討論に取り組んだ。

「調べる」過程までに培った見方や考え方を生かした発表をさせるために、自分の立場を選択させ、根拠をもたせて発表させるようにした。

討論は右の流れで行った。意見を聞いたり、反論をしたりする



【根拠をもって発表する子ども】

際には、必ず自分の考えをノートに記述させた。

工場の立場の意見は、工場あつての市民の生活であるという意見が多

- 討論の流れ
- ① 各立場からの意見（5分ずつ）
 - ② 作戦タイム（8分）
 - ③ 反論（15分）
 - ④ 振り返り（7分）

けいやくである(やぶるが)
市の税収の半分は
チンソから(チンソの生活)
事実をすなおに
打ち明けられるの?
お金がないといけない

【工場の立場の意見】

数であった。また、事実が発覚して素直に打ち明けるのは難しいという意見もあった。また、西田工場長を取り上げ、反省しているからいいではないかとの意見もあった。

被害者の立場の意見は、工場の対応の遅さや誠意がないということを訴える意見が多数であった。また、魚が売れなくなり生活が苦しくなったことを振り返りながら意見を言う子どもも見られた。

行政の立場の意見は、工場の対応の遅さ、命とお金の交換になっているのではないか、患者は早く言うべきではないか等、工場や患者に対する意見が見られた。

反論の時間については、工場あつての市民の生活であるという意見に対する意見が多く、工場の水俣市に占める力の大きさを感じている子どもが多かった。

「人、環境、生産どちらを考えることが解決につながるのだろうか。」と問いかけ、問いを残して本時は終えることとした。

チンソは周りのことを
考えるべきである
だましているのはよくない
早く止めるべきだった
罪をおかしているのに
赤字はチンソの責任
お金は医りよう費

【被害者の立場の意見】

悪いと分かっているのでは?
天竺人とお金の交換に
なっていないか。
命の方が大切ではないか
チンソは早めに対処すべき
なぜ早く言わないのか(患者たち)
元々は漁業の町

【行政の立場の意見】

② これまでの学習を振り返った個人新聞

これまでの学習を振り返らせ、自分の考えをまとめさせたところ、以下の姿が見られた。

この勉強で一番心に残ったのは、
細川一さんです。人命は生産より優先する
ことを企業全体に要望する。という言葉が
あります。初め言葉の意味がよく分からなかつ
たけど、授業(単元)の終わりに分
かりました。私も細川さんのように人の命
を大切にしたいです。この言葉は、チッ
ソ側
にいた細川さんが退職して患者側のほう
にいた細川さんが、チッソ側の人達に一番
伝えたかったのだと思います。

【人命の大切さを訴える視点からのまとめ】

私はこの四大公害病の患者を
増やさないうために、産業より命を
ゆう先したいです。この水俣病か
ら産業は喜びだけでなく、悲し
いこともあることが分かりました。
私は人と産業のかかわりをもう
少しよくしたいと思いました。人
はもう少し産業に感謝し、工業
の方は人のことをちゃんと考え環
境のことをしっかり考えるべきだ
と思いました。

【人命、産業、環境それぞれの視点からのまとめ】

討論的活動を通して明らかになった人命や環境、産業のどちらを優先すべきだったかについて、これまでの学習を生かしたまとめをつくることを指示した。

これまでに学習をしたことを振り返りながら、自分だったらどうするか、どんな社会を願うのか、自分を軸としたまとめとなった。

このように、友達の考えに学ぶ場を設定するだけでなく、自分の考えを整理・再構成させることで自分とのかかわりを意識させることができる。

「人命と環境を守るべきである視点からのまとめ」
四大公害病は、利益を
張りの為、引き起こさ
れたことが分かった。も
ろ、自分が社員だったの
で、過去の失敗を反省し、
後悔を覚えて、そのことを
みんなに伝えるたい。

6 成果及び今後の課題

(1) 成果

各学習過程や一単位時間に自分とのつながりを意識させる働きかけを入れることで、単元の終末には、自分自身や自分の生活とのつながりで見える子どもの姿が見られた。

(2) 課題

追究を人物の考えに沿って進める方法を考慮することで、細川一氏や西田栄一氏の考え方により共感しながら学習を進められた。

7 終わりに

全国的に社会科嫌いの子どもが増えていると聞く。社会科を担う教師として残念に思うし、何とかしたいという思いにもなる。

本実践は、21年度の実践の一部である。4つの視点を取り入れた授業を意識しながら1年間取り組んでみた。そして、1年間かかわってきた本学級の子どもは「社会科が好きだ」と言ってくれた。得意教科だとも言っていた。社会科教師にとって、子どもからこのように言われるほど嬉しいものはなく、今後の励みにもなる。

教師が自身の見る目を鍛えながら社会的事象を紐解いていくことで、見えることから見えないことが明らかになり、子どもとともに解決したいと思えるのではないだろうか。社会を見る目が育った子どもは、社会を形成する一員としてどうあればいいのかも考えたいのだろうと本実践を通して感じたところである。